

# 炭焼きの魅力・可能性語る

北区で雲ヶ畑・南丹の生産5団体サミット

## 活動報告や情報交換

炭焼きに携わる人々が交流する「炭焼きサミット」が27日、京都市北区の雲ヶ畑小で開かれた。雲ヶ畑や南丹市日吉、園部、美山各町で炭焼きに取り組む5団体が、それぞれの活動を報告。森や火と向き合う仕事の魅力や可能性について意見を交わした。

サミットは、南丹市美山 ジェクトを立ち上げ主催し町下で約20年前に炭焼きをた。開催は昨年12月に続き復活させた澤田利通さん（76）が、炭焼きに取り組む人の輪を広げようとプロ

を報告した。雲ヶ畑で唯一の炭焼き窯を運営する塚本直治さん（65）は、江戸期から炭生産が盛んだった地域の歴史や雑木林再生に向けた幼木の植林活動を説明。南丹市日吉町の住民グループ「里まる」のメンバーは、5年前に始めた白炭作りを紹介し、「回数を重ねるほど硬く良い炭にな

る。高齢化が進むが長く続けていきたい」と意気込んだ。

午後には塚本さんが講師を務め、「炭ほんさい」作りに挑戦。炭に穴を空けて作った小さな鉢に、モミジやクリなどの木の芽を植え、室内で楽しめる盆栽に仕立てた。その後は塚本さんの炭焼き窯も見学。中からパイナップルや栗など変わり種の炭が出てくると、驚きの声が上がった。

参加者はそれぞれの窯の形状やサイズ、温度調整の工夫についても情報を交換。「幼い頃にかいた煙や窯のにおいが忘れられない」「生き物を育てている感覚がある」など、炭焼きならではの魅力も語り合った。主催した澤田さんは「若い人にも炭焼きの良さを伝え、それぞれの地元でつないでいってほしい」と語った。（井上真央）



京都市や南丹市の団体が取り組みを報告した「炭焼きサミット」  
（京都市北区・雲ヶ畑小）



炭焼き窯を見学する参加者  
（京都市北区・雲ヶ畑）



ワークショップで黒炭の鉢や植える木を選ぶ参加者  
（京都市北区・雲ヶ畑小）